『青春文化』の『青春』

『青春』の社会学的理解

——『タッチ』の社会学的理解

屋村正之

「上杉達也は現代を象徴しています」

あだち充『タッチ』は、一九八一年から一九八六年にかけて、雑誌『少年サンデー』に連載され、青年たちから少年・少女たちにかけて圧倒的な人気をもってむかえられたマンガ作品である。単行本は全二六巻に及び、アニメーションとしてテレビ・ビデオ化・劇画化されたりもした。テレビ・ニュースのスポーツコーナーには、ヒロインのイメージを通じて、各学校のスポーツ少女たちを紹介する企画もあらわれ、この作品はメディア・ミックス現象を代表する人気作品となった。

『タッチ』の作品の内容は、のんびり、マイペースの上杉達也と明青高校野球部の努力型エース上杉和也の、ふたりの兄弟、幼なじみで新体操の花形選手である浅倉南の三角関係を中心として、ライバルたちとの兄弟甲子園出場をめざしていく物語である。和也はひとにやさしく、やさしくて、お人好し、努力で栄光をつかんでいく。しかし、和也はいつも甲子園出場は兄を犠牲にしてのものだと思っている。兄の心労は達也にもいっているようすで、和也は兄を犠牲にしてまで甲子園に行くことを拒絶している。達也は南を甲子園に連れていくことで新緑会の先行きを心配しているのだが、一年生のときの子供会議、夏目、交通事故により、死亡する。エースのいない明青高校チームは敗れる。かわって、練習は、ますます、厳しくなり、根性もないと評価されている達也がピッチング部をやめ、野球部のエースとなり、くマもしっかりかえしながらも、天性のセンスを発揮して、甲子園をめざしていく。新田・西村という強敵の存在、力強い手たちは野球部のライバルとなるが、南をとりまく恋敵でもある。三年の夏、野球部を愛し、明青野球部は勝ち進み、決勝戦で最大のライバル新田明男がひきいる須見工とぶつかる。甲子園出場をはたす。

この作品の結末で、主人公・上杉達也は、幼なじみの浅倉南に、冒頭のような言葉で愛を告白した。

2　文芸の社会学

本来のような作業を厳密に社会学的に位置づけるならば、文芸の社会学に比較的近いといえるであろう。もちろん、マンガ作品は言語と絵によって表現されるものであり、表現の言葉では文芸作品とはいいきれないが、文化作品としてとらえようとすれば、多くのひとと文芸の社会学に参ようとすることができる。文芸の社会学の役立や可能性については、表現の分析があるが、これ以上ここでの議論は、ひとまず、この三つに分類できる。【第一】は文芸作品をとりまく行為環境を社会現象として分析するものである。R・エスカルピは、文芸作品をめぐる生産・分配・消費に関する行為環境を、出版業界、読者に上とる行為環境としてとらえ、それらと産業や学歴などの社会学的要因との連関を分析している。このタイプの研究は、事物の社会学ともいうべき内容をもふくんでいる。【第二】は文芸作品の知識社会学である。これは、文芸作品の内容や形式、作者の生活史や社会的存在を相互に関連づける社会構造との相互性を検討するものである。G・ルカーチは、ギルバンテスの作品『ドン・キホーテ』を、高い理想的存在が、現実的な世界と、どうしようもない矛盾を生じ、主人公を悲劇的な人間の典型として分析する。【第三】は文芸作品に表現される人物たちの生活世界の社会学的分析である。このタイプの研究において、作品自体を登場人物たちにとっておりなされる相互作用の世界としてとらえ、その人物たちの意識や行為から社会学的な現象や原因・命題を発見・考出していく。A・シュッツは、同じ『ドン・キホーテ』を、われわれがこの作品に現実を社会学するかという多元的現実の問題を問題にした作品としとらえ、ドン・キホーテが生きる騎士の世界という幻想の下位多元現実と、日常生活の現実とのせめぎあいに着目する。

本章の試みは、これらのうち、第三のタイプに属するものである。このタイプの研究は、R・ジラールのいうところの社会の紹介を通じて、日本でも試みられ、作品考察の研究、加藤秀俊の研究などに、その一端をみることができる。また、梅田を位置づければ、D・ブルースの日本人のライフコースの分析における文芸作品の利用もあげられよう。

文芸作品というものは、それを生んだ社会をうつしだす鏡であるといわれ、これまでに社会学者も一定の関心をはらってきた。それは、作者の想像力を媒介として、それぞれの時代と社会と人間を、社会学の原理を用いて理解するための考察様式であった。本稿もそのような考察様式的な試みのひとつである。

3・2　甲子園出場と南の愛の葛藤

1　欲望の三角形の重層的構図

『タッチ』には、この作品を理解するうえで重要と考えられる、ある社会的役割を担った三人の人物がいる。まず、達也と同学年である吉田である。吉田は明青高校野球部特待生として、達也の投手としてスカウトされ、達也の投手となり、甲子園出場をめざす。その少年たちは、達也と同学年である浅倉南である。南は、吉田の恋人であり、達也の幼なじみである。そして、吉田を通じて表出される社会的命題とは、甲子園出場で明青高校のまえにたちはだかった。そして、吉田を通じて表出される社会的命題とは、R・ジラールの「欲望の三角形」である。

欲望の三角形とは次のようなものである。欲望の主体をS、客体あるいは対象物をO、欲望を媒介する他者をMとすると、Sから直接的に欲望するのではなく、Mを通じてOに対する欲望を模倣することによって欲望する。このS、M、Oの三者関係を基本として、ジラールは「欲望の三角形」という。この命題の含意は、人間はひとりで独自に自律的に考え、人びとはひとりで、人間は自由になりうるということである。欲望の三角形の図式は、主体と媒介者との社会関係により、二つの下位構造に区別される。第一は、SとMの直接的関係が強く、Sの心のなかで行為に対する欲望が、Mの直接的影響を強く受けており、Mが欲望の対象Oを与えている場合である。外的媒介者とよばれる。外的媒介者は行為主体にとっての欲望対象と、主体にとっての欲望対象とが